

女性と音楽研究フォーラム 会報 第11号

Bulletin of Women & Music Study Forum Vol. 11 (January 2013)

目次

音楽取調掛および東京音楽学校教員（明治期）のジェンダー [2011年度第3回例会発表要旨]（玉川裕子）	1
戦前期礼儀作法書にみる音楽 [2011年度第4回例会発表要旨]（歌川光一）	4
『作曲家・吉田隆子 書いて、恋して、闊歩して』（教育史料出版会） [2011年度第5回例会出版報告]（辻浩美）	6
ヴェネツィアの福祉施設オスペダレ研究における同定問題と 女性音楽家たち [2011年度第6回例会発表要旨]（室町さやか）	8
会員近況報告（竹山貴子）	9
会員自己紹介コーナー	10
2011年度例会発表一覧（講演、出版報告を含む）	11
コンサート・イベント開催情報	12
ニュース etc.	13

女性と音楽研究フォーラム

Women & Music Study Forum

2011年度第3回例会(2011.8.27)発表要旨
音楽取調掛および東京音楽学校教員(明治期)
のジェンダー

玉川 裕子(たまがわ ゆうこ)

1. はじめに

近代日本における西洋音楽文化の発展に大きな役割を果たした音楽取調掛および東京音楽学校では、その設立当初から女性教員が活躍していた。幸田延と幸の姉妹、橘絲重、久野ひさ等ほんもっともよく知られた名前だろう。近代日本において、少なくとも西洋音楽文化が移入発展していった場合は、西洋とは異なり、女性にも開かれた場であったようにみえる。しかし本当にそうだったのだろうか。

本発表では、上記の問を検証するために、明治時代に着任した音楽取調掛／東京音楽学校教員をリストアップし、その男女比を具体的に明らかにした。さらに、当時の女子教育の流れや、東京音楽学校の女性教員に対する同時代のジャーナリズムの言説等を考察することによって、近代日本の西洋音楽文化発展の初期段階において、女性の寄与が社会的にどのように受けとめられ、位置づけられていったのかを検討した。なお、教員の抽出にあたっては、『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第2巻』(東京芸術大学百年史編集委員会編、音楽之友社、2003年)巻末所収の「東京音楽学校職員一覧」および「東京音楽学校職員在職年表」をもとにした。

2. 音楽取調掛および東京音楽学校の教員

表Aは、同校に明治時代に着任した教員を、着任年順に一覧にしたものである(本要旨では表は省略)。総数157名、うち男性は102名、女性は55名である。このうち、音楽取調掛時

代に着任した教員は28名で、男女の内訳は男性17名に対して女性は11名である。また、男性102名のなかには、音楽取調掛設置前より洋楽の習得に着手していた宮内省楽部に所属する楽師たちが17名含まれている(音楽取調掛時代の着任者は5名)。

表Bは、表Aを担当科目および性別によって並べ替えたものである。この表から、校長および音楽理論系は男性のみであったこと、女性教員の多くは実技担当であったことが即座にみとれる。

3. 女性と音楽——近代日本におけるその受けとめ方の変遷

音楽取調掛／東京音楽学校の女性教員数は、女性に就労の機会がほとんど与えられていなかった明治期としては異例なほど多い。そもそも女性には高等教育の機会さえ無きに等しい状態であった明治初期、音楽取調掛は女性に門戸が開かれた数少ない高等教育機関のひとつであった。だがそれは、音楽の領域が性別役割分担に基づく女性の公的領域からの排除という近代社会のメカニズムと無縁だったことを意味しない。明治期は、旧来のものと欧米由来のジェンダー観がせめぎ合いながら、新社会の要請に呼応して新たなジェンダー観が構築されていった時代と捉えられる¹。明治日本において初の音楽専門学校であると同時に、高等教育機関としては唯一の男女両性がともに学び教授する場であった音楽取調掛／東京音楽学校のあり方は、和洋新旧のジェンダー観がいったんは混じりあいながら、そこから新たなそれが立ち上がっていく過程で、そのときどきのジェンダー観が音楽をめぐってどのように発動したかを具体的に示しているものといえる。以下にいくつかの観点を挙げる。

a. 「女性と音楽」をめぐるイメージ

音楽取調掛／東京音楽学校が女性にも門戸を開いた要因のひとつとして、「音楽は女性にふさわしい」というイメージが、新生日本が手本にすべき欧米の生活文化のみならず、近世以来の日本のそれにも含まれていたことが挙げられよう。進取の気性に富み、向学心に燃えながら、他分野において専門教育を受ける機会が閉ざされていた女性たちのうち、音楽に特別な関心を寄せる者は音楽専門学校の門を叩いた。「音楽は女子供のもの」というイメージは、帝国主義時代の世界情勢のなかで早急な国民国家構築のために、なによりもまず政治・経済・工業技術の分野で優秀な人材が求められた時代にあつて、むしろ男性が音楽の道に進むための障害となった。そうしたなかで、新しい音楽を食欲に吸収していった優秀な女子学生たちは、母校に残って更なる研鑽を積みながら、同時に後輩を指導する立場となつていったと推測される。その際、女性を教えるのは女性のほうが好ましいという暗黙の了解が、女性教員の雇用を促したと推測される。

b. 女性教員の担当教科

女性教員が担当したのはもっぱら実技であつた。これに対して、音楽の歴史および理論に関する科目を担当した女性教員は、和声学を教えていた幸田延を除けば皆無である。音楽史や美学を教授するにあたっては、帝国大学等、東京音楽学校以外の高等教育機関での修業が求められる。それらの教育機関が女性に閉ざされていた以上、上記科目を教授可能な女性はいなかつた。他方、楽典や音楽理論を担当したのは、音楽取調掛／東京音楽学校を卒業した男性教員たちであつた。実技と理論の両方を担当した者も少なからずいた。楽典や音楽理論の教鞭をと

る女性教員がいなかつた理由を、彼女たちの能力の問題に帰すことはできないだろう。ここには、感性に関わる実技はともかく、理論系は男性の領域とする欧米の音楽文化におけるジェンダー規範の受容をみることができるよう思われる。

c. 幸田延と柴田環の辞任問題をめぐって

1909〔明治42〕年9月、当時助教授だつた柴田環（再婚姓：三浦）が最初の夫藤井善一との離婚を理由に辞職した。時を同じくして、幸田延教授が休職した。彼女の正式な退職は2年後であるが、事実上の辞職である。幸田の退職の理由については、彼女個人の問題ではなく、女性音楽家が指導的立場にあることに対する妬みや批判によるバッシングがその背後で働いていたと考えられる²。

音楽取調掛設立からほぼ30年を経た明治末期、その後身の音楽学校においても多くの女性教員が勤務していた。1905年から1914年までの10年間に東京音楽学校で音楽関係の教鞭をとっていた教員を抽出してみると、西洋音楽の実技分野でいわゆる専任の職にあつた者は男性12名に対して女性13名である。男性の専任はさらに邦楽で1名、音楽理論関係で4名いるので、学校全体としての専任教員は男性のほうが多くなるが、西洋音楽の実技分野に限れば女性の専任教員が男性とほぼ同数である。

すでに明治30年前後、音楽分野における女性の活躍を許しがたいとする言説が現れ始めていた。たとえば『帝国文学』の1899（明治32）年7月号に掲載された「音楽界」と題された一文は、その年の留学生に滝廉太郎ら男性志願者をおさえて幸田（婚姻姓：安藤）幸が選ばれたことを批判している。技術的には幸田の方が優秀であるが、海外派遣の目的が指導者の育成に

あるならば男性の方がふさわしいというのである。明治30年代前半は、日清戦争以来の高揚した国家意識のなかで、富国強兵策が推進され、女子教育の確立を通じて「男は仕事、女は家庭」という近代的な性別役割分業観の浸透が図られた時代であった。指導的な立場にある、あるいはなりうる優秀な女性音楽家に対する批判は、まさに女性が国家政策によって家庭領域に囲い込まれ、良妻賢母をその理想とすべく定められたのと軌を一にしている。

その後、東京音楽学校の「風紀問題」がジャーナリズムを賑わせ、音楽学校を女性教員が牛耳っているとして非難する記事が相次ぎ、柴田環に続いて幸田延が辞任せざるを得なくなったのは、日露戦争勝利後のことであった。近代化が進み、国民国家として国際社会で認められたと人びとが感じたとき、音楽のような「役に立たない」芸術の存在を許容する余裕が生まれた。だが、音楽の社会的地位が上がれば上がるほど、女性が指導的立場にあることを許容しがたいとする知覚もまた強くなっていったと考えられる。

☆本論の詳細については、以下の拙論参照。

玉川裕子「音楽取調掛および東京音楽学校(明治期)教員のジェンダー構成」、『桐朋学園大学研究紀要』第38集(2012年)

¹ 大越愛子『近代日本のジェンダー——現代日本の思想的課題を問う——』、三一書房、1997年、第1章参照。

² 2012年早春に出版された『幸田延の「滞欧日記」』(東京藝術大学出版会、2012年)のなかで、編者の一人である瀧井敬子は、当時の新聞雑誌、さらには関係者等の書簡や日記、回想録等をしていねいにたどって、幸田延の辞任の顛末を明らかにした。それによると、彼女が女性ながら「技術監」として音楽学校を実質的に統率していることに我慢のならない湯原元一校長をはじめとする男性たちによって、彼女は事実上東京音楽学校を追い出されたという(9-34頁参照)。

歌川 光一 (うたがわ こういち)

本発表では、戦前期の女性の音楽文化、特に楽器習得の教養の位置を把握する上で、礼儀作法書が果たし得る可能性に関して、報告者の研究をめぐる近況を交えながら紹介した。

近年、(都市中上流階級の一以下省略)女子の教育・文化をめぐる歴史社会学研究は、芸術的素養が女子の自己形成に果たした役割に関する知見を蓄積しつつある。女学生文化の実態に触れた、稲垣恭子『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』(中央公論新社、2007年)や、少女雑誌における少女にとっての「成功」の意味を分析した、今田絵里香『「少女」の社会史』(勁草書房、2007年)等は、女子の芸術的素養の考察それ自体を目的とした研究ではないが、「箏、長唄などの遊芸もたしなんでいた女学生」や、「女流音楽家を『成功』の象徴として掲げた『少女』」について言及しており、音楽文化研究においても示唆に富んだ研究となっている。

また、マス・メディアにおける言説の検討、「文化資本」論の近代日本への適用、小説の表象分析といった歴史社会的な手法も、事件史に収まらない音楽文化史の構築に貢献するものと言える。

本発表は、上記の研究関心の延長に位置づけられると考えられる、山崎貴子「近代日本における『たしなみ』への関心の高まりとその変容—礼儀作法書刊行動向の分析から—」(『教育・社会・文化』第12号、2009年)の視点や、陶智子・綿貫豊昭『近代日本礼儀作法書誌事典』(柏書房、2006年)をはじめとする、資料整備の進展状況を踏まえ、国立国会図書館所蔵の礼儀作法書を題材に、その資料としての可能性を模索した。

礼儀作法書は、楽器習得の教養の実態そのものを反映するとは限らないが、家庭生活の各場面に相応しい振舞いを紹介するものであり、楽器の受け渡しの仕方のみならず、音楽・楽器の初出の時期や、人に演奏を請う際の態度、また、「欧米式」「女礼式」といった礼儀作法の種類と楽器の関係等、多様な分析が可能となる素材である。次頁の表は、明治～大正期の女性向け礼儀作法書に見る音楽・楽器の記載の有無である。

議論の中では、礼儀作法が「市民」としての教養の試金石となった可能性、聴衆としての礼儀作法の内実、楽器演奏の際の服装、師弟関係の持ち方など、家庭生活に収まらない「礼儀作法」の可能性が活発に論じられた。

(東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

表：明治～大正期の女性向け礼儀作法書に見る音楽・楽器の記載の有無

タイトル	年	邦楽・雅楽												洋楽			音楽会	その他
		琴	三味線	尺八	琵琶	月琴	胡弓	笛	横笛	太鼓	鼓	笙	箏	ヴァイオリン	ピアノ	オルガン		
英米礼記	1878	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	
小学諸礼式	1882	○	×	○	×	×	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×		
〈男女普通〉礼式書	1884	○	×	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×		
〈註訳増補〉小学女礼式	1884	○	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
日本礼式小笠原流要略	1887	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
〈家庭教育〉女学校	1890	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	○	○		唱歌
日本の裁縫と女礼〈上〉／〈下〉	1892	○	×	○	○	×	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×		
日本諸礼独稽古	1892	○	○	○	○	×	○	○	×	○	○	○	×	○	×	×		
〈新撰〉男女諸礼式	1893	○	×	×	○	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×		
日本女礼式	1896	○	×	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×		
〈新選挿画〉日本諸礼式	1898	○	×	×	○	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	×		
新撰小学女礼式	1899	○	×	○	○	×	×	○	×	○	○	○	×	×	×	×		
〈女子〉普通礼式	1900	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
日本女礼式大全	1901	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
日本女礼式	1902	○	×	○	○	×	×	○	×	○	○	○	×	×	×	×		
〈新編〉普通礼儀作法	1902	○	×	○	○	×	×	○	×	○	○	○	×	×	×	×		
女子容儀作法	1903	○	×	○	○	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	×		
新撰女子作法書	1903	○	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×		
普通女礼式	1903	○	○	×	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
新女礼式	1904	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○		
新撰日用女礼式	1906	○	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×		
西洋男女交際法	1906	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×		音楽と訪問
女子礼法の栞	1906	○	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×		
女子作法書〈儀式之部〉〈心得之部〉〈実習之部〉	1907	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
新編礼式	1907	○	×	○	○	×	×	○	×	○	○	○	×	×	×	×		
女子礼法教科書〈高等小学校高等女学校家庭教育用〉	1908	○	×	○	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×		
〈女子〉礼式作法及家訓	1908	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
〈正式〉男女諸礼図解	1909	○	×	×	×	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	×		謡曲の事
明治の礼式作法	1909	○	×	○	○	×	×	○	○	○	○	○	×	×	×	×		
〈文部省令適用〉国民礼法講義	1911	○	×	○	○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	×	×		
家庭節用	1912	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
新撰諸礼式	1913	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○	×	×	○	×	×		
礼式と作法	1914	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
〈普通〉女礼式	1918	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
〈日常礼法家庭儀式〉是丈は心得おくべし	1921	○	○	○	○	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	×		
〈新撰〉日本諸礼式大全	1922	○	×	×	○	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	×		
礼儀と作法	1923	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
〈女子〉作法教科書	1923	○	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×		
礼儀作法の栞	1924	○	○	○	×	○	○	○	×	○	○	×	×	○	×	×		
現代作法精義	1925	○	×	○	○	○	×	○	×	×	○	×	×	○	○	○		謡曲台、蓄音器
現代新礼儀作法〈附挨拶の言葉〉	1927	○	×	×	○	×	×	○	×	○	○	×	×	×	×	×		

注1) 「○」「×」は記載の有無を示す。

注2) 上記礼法書は、発表当日(2011/11/19)時点で報告者が確認可能だった範囲の資料に留まる。

辻 浩美 (つじ ひろみ)

昨年12月5日、『作曲家・吉田隆子 書いて、恋して、闊歩して』を教育史料出版会より上梓した。気がつけば吉田隆子を知って12年、出版の意志を固めてから5年の月日が流れていた。

【出版の経緯】

私が吉田隆子を知るきっかけとなったのが、「日本の女性作曲家」(『女性作曲家列伝』小林緑編著)(平凡社1999)の章の執筆である。女性と音楽研究フォーラムに入会して間もない頃に、当時の代表・小林緑氏からこの話を頂いた。本章では明治から昭和にかけて活動した6人の女性作曲家を採り上げたが、その中の一人、吉田隆子の壮絶な生き方とメッセー性の強い作品に圧倒された記憶が今でも鮮明に残っている。

すでに、優れた研究書として、クリティーク80編著の『吉田隆子』(音楽の世界社1992)があるが、出所から終戦の年まで隆子が綴った「病床日記」との出会いが、本著を執筆する原動力となった。それは、『音楽の探求』(吉田隆子著)に収録された「病床日記」の原本を調査したいと思い、隆子と同居していた久保マサ氏(故人)に頼んで探してもらったことから始まる。残念ながら、その原本はみつからなかったが、他の時期に書かれた「病床日記」を手にすることができた。友人や教え子の助けを借りて、「病床日記」を約2年かけて清書し、これまで空白(「病臥中」とされてきた時代を、補完するだけでなく、「生身の」隆子を知ることができたことは、私にとって新鮮な驚きであり、大きな喜びであった。

【出版の意図】

本著は、隆子が生きた時代や、彼女を取り巻く人間模様や日々の生活を浮き彫りにすることで、「等身大の吉田隆子」を描いたものである。音楽専門書ではなく、一般の読者、特に若い世代を対象に置いた。この種の本では珍しく横書きで、写真や図表を多く掲載したのもその拘りからである。誰にでもさらりと読み進められるよう、専門的な記述は控え、当時の社会情勢や音楽界の動向も踏まえながら、隆子の生涯と音楽を追った。

巻末に楽譜2曲を掲載し、附録として「吉田隆子生誕100年記念コンサート」(女性と音楽フォーラム主催)から選曲したCDを付けた。長年の希望であった「読んで、弾いて、聴いて」の三拍子揃った本を作成できたと自負している。

【内容】

<吉田隆子の生涯と音楽>

1章 月日は待ってくれない、勉強しろ

隆子の生い立ち(1910-28)

2章 「男」と平等にあれ！我に勉学の自由を与えよ！

人形劇団ブークからプロレタリア音楽同盟 (PM) へ (1929-34)

3章 嘘のない作曲を！嘘のない音楽を！

「楽団創生」の創立と活動 (1935-39)

4章 ただ無性に書きたい！書きたい！念しきりなり

「病床日記」を読む (1910-45)

5章 悩みや憤りや、喜びや悲しみを彼女たちに代わって

戦後の転換と創作への希求 (1946-56)

<吉田隆子「病床日記」>

1940年、1941年、1944年、1945年より抜粋

<資料>

音楽作品、執筆作品、著書・楽譜・ディスコグラフィ、略年譜+関連年表、

生誕100年記念コンサート：チラシ、楽譜《カノーネ》、《蚤の唄》、

付録CD解説：収録作品、演奏者プロフィール、作品解説

<付録CD>全6曲、演奏時間40分

1. カノーネ 2. 青年の歌 3. ソナチネ 4. ヴァイオリン・ソナタ ニ調

5. 蚤の唄 6. 組曲《道》より、〈頬〉〈手〉

2011年度第6回例会(2012.3.3)発表要旨
ヴェネツィアの福祉施設オスペダレー研究
における同定問題と女性音楽家たち

室町 さやか (むろまち さやか)

オスペダレーとは中世からイタリアの諸都市でキリスト教機関を母体として運営されていた福祉施設であり、各々の施設によって病院、救貧院、孤児院などの機能を果たしていたものである。ヴェネツィアの4つのオスペダレー——ピエタ、メンディカンティ、インクラビリ、オスペダレットは施設の運営費を稼ぐための音楽活動を行う音楽隊、すなわち合唱隊と器楽隊があわさったコーロ *coro* を有しており、その構成員は全て女性であることが大きな特徴であった。彼女たちの音楽活動についてはゲーテやルソーなどの諸外国の有識者が多くの証言を残しており、オスペダレーの音楽活動が国際的な知名度を得ていたことがわかる。当初はヴィヴァルディと関連のある施設ということで注目を集めたオスペダレーであったが、今日まで同機関については多くの研究が著され、その音楽活動に関わる知見が次々と明らかにされている。しかしながら、オスペダレーの音楽活動は概ね「女性音楽家集団」としてのみ論じられており、ヴィヴァルディ作品のソリストとして知られるピエタのアンナ・マリアや演奏家兼作曲家として活躍していたメンディカンティのマッダレーナ・ロンバルディーニ・シルメンなどの少数の例外を除いてはオスペダレー内部の個々の音楽家に目を向けられることはほとんどなかったと言わざるをえない。しかしながら西洋音楽史上特異な存在であったオスペダレーの音楽活動がこうした無名の音楽家の集団によって形成されている以上、彼女たち個々の実態や活動に目を

向けることはその音楽活動を包括的に明らかにするためにはぜひとも必要なことである。

本発表ではふたつのテーマに添ってオスペダレーの音楽活動について論じた。ひとつめはオスペダレー研究において、とりわけオスペダレー・デッラ・ピエタについて研究を行う際に留意しなければならない女性音楽家たちのアイデンティフィケーションの問題についてである。オスペダレー・デッラ・ピエタの女性たちはその多くが孤児であるために名字を持たないという理由から異なる史料間での同定作業が困難であり、この問題を論じておくことは今後のオスペダレー研究にとって必要なことである。ふたつめはオスペダレーで音楽を学び、職業音楽家となった女性たちの中からアドリアーナ・フェッラレーゼ・デル・ベーネを取り上げ、彼女がオスペダレーを出てオペラ歌手になるまでの経緯を中心に論じた。福祉施設の音楽隊という特異な環境を出発点としたフェッラレーゼに焦点を当てることで彼女が音楽を学んだ時期のメンディカンティの音楽環境を論じ、18世紀のヨーロッパに生きた女性音楽家のキャリア形成の一例を提示することが可能であると考えている。オスペダレーの音楽活動を概観し、フェッラレーゼというひとりの女性音楽家の半生を通じて当時の彼女たちを取り巻く環境を理解することが本発表の目的である。

関連書誌情報：室町さやか「福祉施設オスペダレーの音楽家からオペラ歌手への転身～アドリアーナ・フェッラレーゼ・デル・ベーネにみるキャリア形成の一例～」千葉経済大学短期大学部研究紀要、第8号、2012、pp.69-79.

(非会員・千葉経済大学短期大学部非常勤講師)

ニュース etc.

■ 吉田隆子、NHK番組で取り上げられる

2012年9月2日(日)PM10:00~11:00、NHK・EテレのETV特集で吉田隆子を取り上げられ、大きな話題を呼びました。そのきっかけとなったのは、会員・辻浩美氏の著書『作曲家・吉田隆子 書いて、恋して、闊歩して』です。当フォーラムでは、反響に応じて、2010年12月の「吉田隆子生誕100年記念コンサート」に続けて、再度、吉田隆子を取り上げてのコンサートを企画しました。

(→p.12 コンサート・イベント情報)

■ 結成20周年を迎えるフォーラム

1993年3月に発足した当フォーラムは、2013年に「結成20周年!」を迎えます。20周年を記念して、一つは、コンサート「吉田隆子の世界」の開催。もう一つの企画として、会員の何人かの執筆による「女性と音楽」に関する入門書的な図書の出版の可能性を探っています。

■ ポリーヌ・ガルシア=ヴィアルド研究、ドイツで活発化

2010年の没後100年記念行事以降、ドイツでは、着々と研究が進められています。2012年から、クララ・シューマンやファニー・ヘンゼルの著作でも知られている音楽学者、Beatrix Borchard氏の総合編集による全5巻の"Viardot-Garcia-Studien"という叢書の出版が始まりました。(出版社: Olms-Verlag) 2012年現在、第3巻: "Pauline Viardot-Garcia in Grossbritannien und Irland", von Melanie Stier のみの刊行。

なお、2012年7月より、オンラインで作品目録: Systematisch-bibliographisches Werkverzeichnis(VWV)が無料公開されています。興味ある方は、下記をご覧ください。
<http://www.pauline-viardot.de/Werkverzeichnis.htm>

■ 新刊図書紹介(再掲)

★辻浩美著『作曲家・吉田隆子 書いて、恋して、闊歩して』(教育史料出版会 2011年12月15日発行) 定価(本体2000円+税)
*新たに発見された「病床日記」を原動力として等身大の吉田隆子像を描く。楽譜、CD付

★瀧井敬子・平高典子共著『幸田延の「渡欧日記」』(東京藝術大学出版会 2012年3月5日発行) 定価(本体3400円+税)
*幸田延が明治42年から43年にかけてヨーロッパに滞在した8ヶ月ほどの日記。オリジナル翻刻と翻訳および注釈。

■ 雑報

☆10月28日(日)14時より、経堂めぐみ教会で、ファニー・メンデルスゾーン=ヘンゼルのピアノ曲によるコンサートがありました。演奏者は中田真理子さんという、ドイツで長年研鑽をつまれた方です。ファニーの曲に対する共感の溢れた演奏で、彼女の世界を堪能しました。中田さんは12月22日のフォーラム例会に参加してくださいました。

☆イタリアの音楽団体、ドンネ・イン・ムジカ Donne in Musica のサイトにオンラインブックで、ヨーロッパの女性音楽団体の紹介があります。このサイトには当フォーラム Women and Music Study Forum(Japan) も掲載されていますので、覗いてみてください。

<http://www.donneinmusica.org/it/>

→La Fondazione →Il Comitato d'Onore Asia e Australasia

<編集後記>

市川さんや玉川さんはじめ皆様のご協力のおかげで何とか会報の形を整えることができました。今年はフォーラム結成20周年、良き年となりますように!(川村優子)

女性と音楽研究フォーラム会報 第11号

Bulletin of Women and Music Study Forum Vol.11

編集・発行 女性と音楽研究フォーラム会報編集担当(川村優子)

発行日 2013年1月11日(金)